

## イーハトーブのつぼみ

大久保 貴裕

「柿のように生きる！」  
遠くから聞こえるかもめの鳴き声と共に、この言葉が耳のどこかに焼きついている――。

三陸海岸の小さな港町。役場裏の小さな家の庭先に、1本の大きな柿の木があった。いまから四十年前、この土地に家を建てる若夫婦が「家族の発展」を願い、そのシンボルとして柿の木の苗を植えたという。

その願いどおり、苗はぐんぐん大樹へと成長し、夫婦もいつしか多くの子供や孫に恵まれた。しかし、その子供や孫は大きくなるにつれ、次々と都会へ巣立っていった。そして家には、年をとった夫婦が2人ぼっち。

そんな中、おじいさんが三年前の春に病気で他界。家には足腰の弱いおばあさんが1人、残された。

その年の秋、柿の木はたくさんの落ち葉を家の前の道路に散らし、伸びた枝が電線に触れそうになった。しかし、おばあさん1人では、どうにも対処できない。かつては若さと活気にみち溢れていたこの漁師町にはもう、おばあさんの手助けをする顔見知りの若者はほとんどいなかった。おばあさんは決心するしかなかった。家族のシンボルであるあの“柿の木”を切ることを。

家族のシンボルが倒れる日。この土地に1人残されたおばあさんの目からは、大粒の涙が流れていたという――。

このおばあさん。実は私の祖母である。盛岡の高校を卒業し東京の大学に通う私は、柿の木が切り倒されたことをのちに母から伝え聞いた。

将来の希望を追い求め東京に飛び出した身として、祖母に対する申し訳なさが胸の中で渦めいた。しかし、都会の生活に慣れたいま、いざ卒業後岩手に帰るとなると、どこか躊躇してしまふ。「岩手も好きだけど、都会の方が将来性があるし……」そんな考えが頭をよぎる。

統計によると、岩手県の高校を卒業し、私と同様に2007年度に大学進学した者のうち、県外の大学への進学者が全体の7割にも及んだ。また、岩手県内の大学の卒業生も、毎年7割以上が県外企業に就職する。そして、その多くがなかなか岩手には戻ってこない。岩手県の人口は毎年1万人ずつ減り、地域社会の土台を担う若者が減少している。

一般的に、岩手には家族や地域との強い絆がある一方で、仕事は職種も雇用数も限られ、どうしても「将来への可能性」が限定されてしまう。対して都会には、人・仕事が世界中から集まり「無限に広がる可能性」がある。

しかし、岩手を離れる若者に「岩手がキラいか？」と問うたら、多くは「ノー」と答えるだろう。中学の同窓会で久し振りに顔を合わせた旧友の多くも語っていた。

「ホントは生まれ育ったこの岩手で何かしたい。でもやれることがない……」。

岩手のことを「想う」若者はたくさんいる。しかし彼らの多くは、「想う」だけで、何も行動を起こせない現状にいる。気持ちの中では岩手に貢献したいが、その活かし方が分からない若者。イーハトーブの大地には、その「華」の咲かせ方が分からない多くの“つぼみ”がたくさん眠っている。

情報・交通網の障害が克服された現代、岩手だからできないということは何もない。いま、岩手の社会に求められていることは、様々な夢や想いを秘めた小さな“つぼみ”、その若者が“華”を開ける環境・仕組みを作ること。それは“つぼみ”や肥料を与える役割の政策・取り組

みである。

具体的には、

・若者からアイデアを募り、その実現に向けた支援をする「ベンチャーアイデアコンテスト」など、夢の実現を手助けする企画。

・若者が岩手の将来について真剣に議論し、その意見を議会や行政の現場に直接届けられる「次世代岩手のための若者諮問会議」の設置。

など、これらを始めとした、若者が「考え」「動き」、それが実際に地域社会に効果的に「反映」される仕組み・環境づくりである。

宮澤賢治が思い浮べた理想郷「イーハトーブ・岩手」には、「未来圏から吹いて来る透明な清潔な風」があるという。しかし、いまの私には、まだその希望の風を感じられない。ならば、風を待ってはいけぬ。その風を吹かせるため、私は岩手に戻り「記者」になろうと思う。若さと活力をもって「この岩手の魅力・いま」を伝え広げたい。そして岩手の次世代を担う“将来のつぼみ”が華開くきっかけとなる「未来からの風」を吹かせたい。

いまから十年後。若者の想いが次々と華開いていく“開華前線”の風がこのイーハトーブを駆け抜けていることを、私は切に願っている。

「柿のように生きろ」――。

海水浴からの帰り道、冷たいアイスを手手に大きな柿の木を眺め、祖父は決まって言った。

「柿の“つぼみ”が見えるか？ 柿の“つぼみ”は誰にも気づかれず、ひっそりと“華”を咲かせる。でもな、その“華”が秋にはあの大きな実をもたらすんだ。たかひろ、そんな柿のように生きろ！」――。

岩手に戻ったら、また柿の木の苗を植えようと思う。十年後には、私は三十歳。おそらく自分の子供とアイスを食べながら、あのセリフを口に出していることだろう。かつての祖父と同じ。このイーハトーブの大地で、未来圏からの暖かな風で“つぼみ”が静かに華開き、それがいつか光り輝く大きな実繋がることを願って。